

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 873 号 平成 27 年 2 月 2 日

審判に物言い

今年の大相撲 1 月場所は、横綱白鵬が史上最多の 33 回目の優勝を決めて幕を閉じましたが、その翌日の記者会見において、白鵬が審判部批判を行ったという報道には、正直驚かされました。

力士が審判部批判をするというのは当然禁じ手であり、白鵬の師匠である宮城野親方が伊勢ヶ浜審判部長に詫びを入れて一件落着のようには見えますが、角界に少なからず波紋を広げているようです。

白鵬が審判部批判に及んだ取り組みというのは、13 日目の大関稀勢の里（田子ノ浦部屋）との一戦で、審判からの物言いを取り直しとなったものです。

報道によると、白鵬はこの取り組みについて、「勝っている相撲。帰ってビデオをみたが、子どもでも分かる。悲しかった。もう少し緊張感を持ってほしい」等と審判部を批判。更に「肌の色は関係ない。まげを結って土俵に上がれば、日本の魂なんです。みんな同じ人間です」と述べたとしています（1 月 27 日付読売新聞他から）。

白鵬も人の子ですから、感情の高ぶりもあるでしょうし、その場の勢いというものもあるとは思いますが、発言の内容についてはいささか横綱としての品位に欠けるように感じられて、とても残念に思っています。

私が、横綱の品位に欠けると感じたのは、「子どもでも分かる」程度の事を間違えた、審判部を貶めるような表現をした事、また、「肌の色は関係ない。みんな同じ人間です」と、あたかも人種差別的な審判が行われたかのように批判した事にあります。

実は、私は自宅のテレビで白鵬と稀勢の里の取り組みを見ていました。

最初の相撲は、白鵬が一気に前に攻め上がったのですが、稀勢の里が土俵際に必死の小手投げを打ち、両者が互いにもつれ合いながら土俵下へ落ち、行司軍配は白鵬に上がりましたが審判から物言いが付いて取り直しとなりました。

テレビでは、何度も取り組みの微妙な状況を放映しましたが、私には取り直しという審判の判断は妥当なものだと感じました。白鵬からすれば、私の目も「子ども以下」という事になるのかも知れませんが…。

「勝負に勝って試合に負ける」という言葉があるように、明らかに勢い、力ともに白鵬が勝っていたとしても、互いに必死の真剣勝負をしているのですから、土俵際には何が起こるか分かりません。たとえ取り直しになったからといって、白鵬の

横綱としての名誉に傷が付くはずはありません。それは、場内の拍手喝さいの様子が良く物語っています。

なお、白鵬は審判の誤審とっていますが、大相撲の審判は、土俵下にいる5人の審判が行っており、物言いが付いた時は、土俵上で5人の審判が協議を行います。その際、ビデオ室と連絡を取り、ビデオ映像も参考にしています。その上で示された判断ですから、白鵬といえども潔くあるべきだったと思います。

審判の協議の際にビデオ映像が導入されるきっかけとなったのは、1969年(昭和44年)の3月場所での横綱大鵬と前頭筆頭の戸田との一番でした。戸田の右足が土俵を踏み越えるのが早かったか大鵬の体が土俵を割るのが早かったか、行事軍配は大鵬に上がりましたが審判より物言いが付き、結局、行司差し違えで戸田の勝ちとなり、これによって大鵬の連勝は45で途切れる事になったものです。しかし、この時の中継映像では戸田の足が先に出たように見えたという事もあり、この後、この判定は「世紀の大誤審」といわれています。

大鵬は、勝っていた試合に負け、連勝もストップして、その悔しさは如何ばかりだったかと思いますが、彼が報道陣に対して「横綱としてああいう相撲を取った自分が悪い」と述べたという話しは余りにも有名です。

大鵬のこの一言は、今日においても彼が稀代の横綱であった事を彷彿とさせるに十分です。白鵬には、この大鵬の心境に学ぶべき事は多いのではないのでしょうか。

また、「肌の色は関係ない…」と審判に人種差別的な力が働いたかのような物言いをしていますが、彼にそういわせるような何かが今の相撲界にはあるのでしょうか。

いうまでもなく、どのような分野であれ人種によって差別的な取り扱いは許されるものではありません。日本の国技といわれる大相撲においてもそれは同様で、外国人に門戸を開いた以上、人種による差別があってはならない事は当然です。

少なくとも、白鵬一稀勢の里戦での審判部の判断に人種的差別があったとは、私には感じられません。

さて、先程「世紀の大誤審」によって連勝がストップした大鵬のお話を致しましたが、連勝ストップという事でいえば双葉山の70連勝ストップもまた歴史に残る名場面といえましょう。

1939年(昭和14年)の1月場所4日目、70勝目を掛けて戦う相手は前頭4枚目の安藝ノ海。双葉山、安藝ノ海互いに投げ合い、最後は共に倒れますが双葉山の体が先に土俵に付き、連勝は69でストップとなりました。

会場騒然となる中、双葉山はいつもと変わらず安藝ノ海と一礼を交わし、静かに土俵を去ったといえます。そして、その日の夜、人生の師とも仰ぐ安岡正篤氏(陽明学者、思想家)に「未だ木鶏たりえず」と打電したという話しもまた、非常に有名です。

木鶏というのは、木製の鶏のように、どんな敵にも動じない最強の闘鶏を指して

いますが、双葉山をしてなお「未だ木鶏たりえず」といわしめる程に勝負の世界は深遠だという事ではないでしょうか。

今や向かう所敵なしの白鵬であり、記録としては大鵬や双葉山を凌いで余りありますが、今回の一件は、白鵬が大鵬・双葉山という両横綱の心境には未だ及ばざる所大きいと感じさせるものとなりました。白鵬の、今後もう一段のご精進を心から期待するところです。（塾頭：吉田 洋一）